

優秀賞 独立行政法人水資源機構理事長賞

富郷ダムと祖父の山

徳島県 徳島市立南部中学校

一年 林 正 基

祖父の故郷は愛媛県新宮村（現在の四国中央市新宮）である。緑が多く、生家のすぐ横を川が流れ、夏にはキャンプ場として賑やかになり、冬には雪が積もる。日々忙しく、時間が足りないと感じながら過ごしている両親やぼくだが、新宮はそんなぼく達を温かく、そして優しく迎えてくれる癒しの場所である。

祖父は今七十七歳。祖父から聞く話は、七十七年間祖父が歩んできた歴史を知ることができ、いつも楽しくわくわくする。

十三才のぼくの誕生日、祖父がまた話してくれた。それは新宮にある「祖父の山」とだ。

「新宮にあるじいちゃん山のの一部は、富郷ダムを造る時、ダムに沈んだんよ。たくさんあった木も切り出されてなあ。ダムを造るには、大勢の人が動いて、長い時間がかかったんじゃ。」

祖父は普段無口で冷静だが、故郷を語る時は、目を輝かせ少年のようになる。そして、おしゃべりになる。

それにしても、ダム建設に祖父の山が関係していたなんて……。

「水資源開発公団」から届いた数々の郵便物をぼくに見せながら、祖父の話は続く……。平成五年に届いた用地調査についての書類を初めとし、説明会・実地調査・補償交渉・登記など祖父が富郷ダム建設にかかわった年月は八年に及ぶ。公団の方々は土地所有者の方々に何度も会い、説明に回り、地道な努力を続けられたそうだ。

「いくら仕事とは言え、説明に回り、地道な努力を続けられてさうだ。懐かしい場所を手放すことに抵抗はあったけど、誠実な態度に感激して、山を手放す決心をした。何より水は、人間の暮らしに欠かせないものやけん。」

祖父の目が、一段と輝いた。
「じいちゃん、かつこいい。」

とぼくは思った。

富郷ダムについてインターネットで調べてみると、建設工期は、昭和四十九年四月から平成十三年三月まで、二十七年間もの時をかけた造られたことが分かった。都市用水の供給と発電を目的に住む人々に快適な暮らしをしてもらうために建設されたのだ。

祖父の話を聞いたぼくは、普段身近にある『水』について改めて考えた。ぼくの住む徳島は、東西に吉野川が流れ、自然に恵まれた暮らしやすい土地だと思う。蛇口をひねればきれいな水がすぐに出る。もちろん生まれから水不足を体験したこともない。

父や母も、
「これまで水について深く考えたことはなかったし、節水することさえできていたかどうか分からない。恥ずかしい話やな。またじいちゃんから大切なことを教えてもらったな。」
と言っていた。

恵まれた環境からぼくは、水は限りなくあるものだとは知らず知らずのうちに思い込み、錯覚をしていた。でもそれは間違った考えだった。現に人々の暮らしを守るため、ダムは人工的に造られたものである。ダム建設にかかわった大勢の人々の努力や、祖父のように大切に懐かしい場所を提供した人々のおかげでできたものである。

祖父の話から、ぼくは忘れてはならない大切なことを学んだ。
「資源は限られている。だから大切にしなければならぬ。」

スギ・ヒノキ・マツ・クヌギ・クリ・ビワ……。祖父の山から切り出された数々の木々と山は、周辺に住む人々に水を供給するという大切な役目のためダムとなった。ぼくは、静かに時間が流れ、ぼく達家族の癒しの場である新宮をまた訪ねてみたくなった。